

「我身にたどる姫君」前篇末尾部の解釈

八 嵐 正 治

この物語は前・後篇に分かれるが、前篇の半ばあたり迄で完結した物語世界を形造って居る。勿論、「源氏物語」の影響下にあるもので、関白・三位中将の親子は桐壺・光源氏の親子に、三位中将は薫に、二宮は匂宮に、女三宮は藤壺に、そして我身姫は浮舟にそれぞれ譬えられる。三位中将の実直さ、二宮が当初から我身姫に迫る好色性と行動力、三位中将が女三宮に迫って髪の毛を握む描写迄そのまゝであるが、たゞ異なるのは、光源氏の藤壺への思慕が、年も違い、母への思慕に重なるのに反し、三位中将と女三宮の関係は全くの愛人関係と言ってよく、三位中将の年は不明だが、後篇に出る殿の中將の初めの頃の年齢と同じ程と目されるから十七・八と見てよからう。女三宮の方は、卷三に、「この宮二十にまだしきほどの御あはひ」とある所から、問題の卷一のあたりでは十五歳ぐらいと考えて然るべきであらう。この好年齢の二人が逢瀬を行うが、以後、三位中将は、女三宮の頑な拒否に

あう。そして父・水尾院が、後見のない不安さから、「四十にまだ二つは足りたまはず」と云う老人・関白に女三宮を嫁がせてしまうのである。物語はこれで一応の完結を示し、「源氏物語」を凝縮したような形で終るが、たゞ、子供の方が先に密通し、父に当たる関白がその後で結婚という形をとり、その後又、子供の三位中将が密通するという猥らな性の営みが記されている所が異なる。この物語の本質が抬頭するのはこの後である。

この物語は、五つの意味ある姦通が描かれる。第一は、描写こそないが、この物語の主人公・我身姫が、水尾院の妃・皇后宮と関白の密通によって生れた子であるという事である。第二は、あれ程拒否していた女三宮が、卷三・前篇最末で再び三位中将と結ばれてしまう事であり、こゝで初めて父を裏切るといふ「源氏物語」の主題が再現する。第三の密通は殿の中將（三位中将の子）と、二宮の子で宮の中將の妹である

麗景殿女御との間で行われるが、この時期は明記されていない。本文上、後篇が始まった時から既にその関係であったと解されるが、その後の事かもしれない。ともかく麗景殿女御は、二宮の血をひいた、大変色っぽい女性として描かれてはいるが、その触れる所は少い。第四の密通は、宮の中將と関白の子（実は三位中將の子）と後涼殿中宮との間で行われる。

第三の密通とこの第四の密通はこの物語の人間関係の地模様形成上に大変重要で、どうも当初から計画されていたらしく、第三の密通の間で生れた子・忍草姫は今上に、第四の密通で生れた子・初草姫は東宮にそれぞれ入内している。第五の密通こそ、この物語の頂点を形造ると私は考えている。我身姫の子一品宮と、藤壺皇后第一皇子悲恋帝（既婚であるから密通といってよいであろう）との恋である。両者とも早く死んでしまうので、この二人には子供は出来ない。その為、この二人の恋は、当初の計画にはなく、執筆中に作者の生んで行った創作の、将に作者の中に醸された、そして書いて行く中に、自在に作中人物が動き出す物語の醍醐味を示す人物造形であった可能性があるのである。今井源衛氏編纂による七冊本¹で、卷七本文は、13頁から132頁迄あるが、初めての逢瀬を別として、75頁から最末迄、この記事の連続で58頁に及ぶ。これは同じく前斎宮の性を画いた卷六全体の、11頁から144頁、即ち実質133頁の半数に近い。その上、卷六は青女房に関する記事が約半数を占めているので、ほぼ同量の頁数が、この物語で

は、一品宮と悲恋帝の恋と、前斎宮のレスピアンの記事に費されているのである。その上、物語を継続して読んで行くと、如何に、この一品宮と悲恋帝の恋がこの物語の頂点を形造っているかがわかるのである。



この物語らしい性格が現われるのは女四宮の性格描写が行われる卷二からであるが、卷三卷末の暗の中の密通描写は、如何にも日本中古・中世の、夜の世界の雰囲気伝えてあます所がない。三位中將が女三宮に、そして二宮が我身姫に迫る所である。前篇の頂点を形成しており、総て闇の中の描写でありながら長丁場である。描写の前提は次のような描写から始まる。この部分、夜の描写である上、作者の表現不足もあって甚だ解りづらい。卷三の最末近くの部分で、今井氏の段分けで行くと、「第一八段波のゆくえ」と仮題された部分に当たる。私はこの夜の部分、基本的には時間を追って書かれているのだと考える。その為、本文にアルファベットを付して説明して行く。

この章の冒頭は、関白が宿直で内裏に泊った夜の出来事で、二宮・三位中將にとっては将に絶好の機会である。

A殿^(関白)の、御宿直にて内に宿らせたまひぬる夜、(二宮は)

例の曹司に籠りおはしまして、責め苛られさせたまふ。

大將も、まして宮^(女四宮)ののたまひなさんさま、うたて思せ

ど、忍ぶることや負けたまひぬらん、隠ろへおはして、さりぬべき隙やと、たばかりたまふ。姫君は、昼より心地なやましとて、昼の御座に御殿籠れるを、人々参りて、「なほ渡らせたまひなんや」と聞ゆ。大将もおはする程にて、(我身姫は) ことにおどろおどろしきさまにもおはしまさざめるを、「なほ渡らせたまはなむ」と、そそのかしたまへば、げに暮れざまはよろしく思さるれば、(我身姫は) 宰相の君・侍従ばかり御供にて渡らせたまひぬ。大将は御送りしたまひて、こなたの渡殿の戸口に、侍従にはかなし事のためひつつ、いみじう忍びて隠ろへおはす。

夕暮れ時、我身姫は誘われて女三宮の所へ行く。三位中将は(1)の線の部分にあるように、人目につかない所に居たが我身姫を送った後で今夜は前の場所から動いて別の人目につかない他の場所にお移りになるのが線(2)の部分である。総て女三宮への恋の為である。

場所は我身姫の部屋であり、我身姫は宰相の中将と侍従を伴って女三宮の部屋へ行く。まずは、「隠ろへおはしてさりぬべき隙やとたばかりたまふ」とあり、その後、夕暮時、「大将は御送りしたまひて、こなたの渡殿の戸口に、侍従にはかなし事のためひつつ」とある所から、侍従と三位中将は一旦、我身姫の部屋に戻っている事は知られるが、我身姫の部屋そのものではなく、の部分のように渡殿の戸口に居り、

我身姫の部屋は空である。たゞ、女三宮への密通の意志を持ちながら我身姫の部屋近くで「いみじう忍び隠ろへおはす」とするのが妙であるが、我身姫とは父を同じくし親しい関係にあるからであろう。

一方二宮は、前々から中務の君(我身姫の女房)を責めては居たが、この夜も又、我身姫に逢わせるようにと、いらいらと責めていられる。次いで描写は二宮の行動に移る。

B宮は、中務の君の曹司に、一人入り臥したまへり。夜も更け人静まりぬるに、中務の君は、単衣ばかり脱ぎすべして、ぬけ足踏みて出でぬ。こは世の常の心づかひとも我ながら思はねど、さはれ、かの御身も思し捨てては、また我身も捨てつばかりと思ひふてたるべし。

二宮は中務の君の曹司に、入り込んで横になっておられるが、こちらの場合は、「ぬけ足踏みて出でぬ」という形で自分から部屋を出て行ったのであるが、その次に「こは世の常の心づかひとも」とあるから、この「こは」は、中務の君が二宮を我身姫のもとへ案内したものと推察される。次いで描写は三位中将の行動の方へ移る。この部分(C)、闇の中の、長い黙劇となっている。

Bの「宮は」に始まり、二宮の行動を写す部分の場所は中務の君の曹司である。二宮のあまりの情熱に、中務の君はその取り持ち役になっている。中務の君は捨て身になつてもと、女三宮の部屋へ二宮を案内して行く。

Cの、「大将は」に始まる三位中将を主とした一段の、女三宮の部屋での出来事の文章は長い。

C大将は、夜の静まり果てぬるを聞き、もとより鎖さぬ戸なれば、やをら押し開けて、風の音の荒きまぎれに、御帳の後にいみじう細りゐたまひぬるに、なほ人やうち身じろがんと聞きたまふ。

「風の音の荒きまぎれに、御帳の後にいみじう細りゐたまひぬるに」とは、風の音の荒いのに紛れて女三宮の部屋（そこには我身姫もおとずれている）の中に入り、の意であり、「なほ人やうち身じろがんと」とは、自分以外に誰か身じろぎする者はいないかと、の意である。

奥の方を、いとやをら開くなり。さればよ、わづらはしと思すに、男のいみじうなよびたるぞ、入り来る。あなうたて、さば、かかることもある世なりけりと、時の間にめぐらかにあさましく思せど、その人と見え分かるべくもあらず。火をあふぎ消ちて、いと馴れ顔にぞ寄りぬる。

視点は三位中将であり、入って来たのは、中務の君に案内された二宮である。「いと馴れ顔にぞ寄りぬる」とあるのは、二宮が、御帳の主・我身姫の所へである。以下、二宮は我身姫を抱き上げて部屋を出ようとするが、三位中将には我身姫のそのうろたえあまれた様子がまざまざとわかるけれど、飛び出して行く訳にもいかない。この後、

女のいみじう思ひ惑へるに、えしたたかにも出でぬにや、

まろび落ちてひこじろふ

という情景になる。「えしたたかにも出でぬにや」とは、男は強引に部屋を出る事も出来ないのかの意であるが、それは夜具を、女と「ひこじろふ」、ひっぱりっこしているからである。次いで、「宮の御ふすまをとらへたまへりけるを、やがて引かれ出でにけり」とあって、「宮の御ふすま」とは我身姫が着ていた大ぶりの衣服であり、それを二宮がつかまえたので、そのまゝ引っぱられて、我身姫は部屋の外に出てしまったの意である。問題はこの段の最後の次の文章の解釈である。

女のいみじう思ひ惑へるに、えしたたかにも出でぬにや、まろび落ちてひこじろふ。宮の御ふすまをとらへたまへりけるを、やがて引かれ出でにけり。いとどあやしうも驚かされたまふべけれど、

最後の、「いとどあやしうも驚かれたまふべけれど」の主語を我身姫と今井氏は考えておられるようであるけれど、私はこゝからが女三宮の心理描写と考えられる。この前文で、我身姫は二宮に、「やがて引かれ出でにけり」と女三宮の部屋を出て行ってしまっているのである。その上、それに続く文章、「疑ひもなき大将と思すに」、「かの君はおのづから知らぬやうあらじ、…」と続く、「思すに」と「かの君は」の接続も主語を変えるには文章上無理である。

三位中将は女三宮に夢中であり、その事を自身承知である

から、女三宮はこの部分では最後迄相手は三位中将と思っており、それを避けるために、「床の下もまろび落ちて、わななき給ふ」という動作に至るのである。

次いでDの女三宮の部屋から抜け出した二宮と我身姫の描写であるが両者は一向に埒があかず、最後は次のような文章になる。

Dこの戸口を出でなんとするを、女の、すべてめづらかに心憂しと思ひ惑ひたまへるに、え出でやらず。狭き枢を音せじと構ふるに、せんかたなければ、かき抱きて、渡殿さまにたどり出づなり。

我身姫をつれ出したものゝ、二宮には一向埒があかず、「この戸口を出でなんとするを、女の、すべてめづらかに心憂しと思ひ惑ひたまへるに、え出でやらず。狭き枢を音せじと構ふるに、せんかたなければ、かき抱きて、渡殿さまにたどり出づなり」といった行動に出る。一緒に渡殿の戸口を出ようとするのだけれど、我身姫があまりにとり乱しているの
で、しかたがないので、狭い枢戸を女を抱いたまゝ通ったのである。

この作者の、シンメトリカルな筆づかいは既に触れた所であるが、このDの部分は二宮を主役として、「ここながらぞ」とあるので部屋と認定しがたいそこに坐り込んだまま、音羽の里での出来事をはじめとして、尼上のあれ程憎らしかった事さえも含めて、二宮はたいそうな恨み言を涯限もなく言う

場面で、二宮の口説きの見せ所である。この口説きの場は、どうもその性格から云っても広々とした所で行われたのではなく、戸口の間とも称すべき小部屋（平安期とこの鎌倉期の関白家の寝殿造りの構造の相違については不明で、全くの推定）で行われたと推測される。

次いでEの部分は次のような文章から始まる。

E侍従は、まして目も合はず、思ひ臥したるに、男のいみじう忍び来るを、異人と思はんやは。ただそれと心得て、やをら隅に寄りて、まろび臥したる。衣の裾のさはるを、ひこじろひ落ちて、いと強うとらへたまへるに、とかく引き動かすけはひ、さすがにひとしるきを、我が御方に聞きなして、いとめづらかなれば、ふと寄り来ぬ。ありし宮なりけりと思ふに、いと恐ろしければ、恥を捨てて、ただ御手にぞ取りつきぬる。

侍従は我身姫の女房であり、女三宮の所へ行く時、宰相の君と共に伴した訳であるが、一旦戻ったらしい。前に引用したAの冒頭の部分に、次のようにあった部分である。

宰相の君・侍従ばかり御供にて渡らせたまひぬ。大將は御送りしたまひて、こなたの渡殿の戸口に、侍従にはかなし事のたまひつつ、いみじう忍びて隠るへおはす。

そして、この、もと我身姫の居た場所で、侍従が目が冴えて臥っている所へ、男がひっそりと忍び足でやって来る。三位中将（実は二宮）が首尾よく女三宮（実は我身姫）を伴って

戻ったと思い、侍従は我身姫の女房であるが、二人に遠慮してそっと隅に寄ってごろ寝していると夜の裾が身体に触れた。その辺の事情は前に引いたように次のような描写になっている。

夜の裾のさはるを、ひこじろひ落ちて、いと強うとらへたまへるに、とかく引き動かすけはひ、さすがにいとゆるきを、我が御方に聞きなして、いとめづらかなれば、ふと寄り来ぬ。

傍点の部分、「ひこじろひ落ちて」は、前に引用した、Cの「まろび落ちてひこじろふ」と似た描写になっているが、この描写は侍従の目からのものなのである。

いなや、こはいかなることぞと思へど、我さし出で問ふべきにもあらねば、ただ呆れたる心地して動かれぬに、ただここもとぞ。女のいみじう思ひ惑へるに、えしたたかにも出でぬにや、まろび落ちてひこじろふ。

Cの部分では三位中将の目を通してあり、三位中将は「夜の静まり果てぬるを聞きて、もとより鎖さぬ戸なれば、やをら押し開けて」女三宮の部屋に入って行ったままなのである。その三位中将がたっぷり首尾よく女三宮を伴って戻って来たのかと侍従は思ったのだが、そうではなくて、「ありし宮なりけり」、即ち二宮だったのである。そして女の方は、「我が御方」（我身姫）だとわかったので、これはとんでもない事が起こっていると、宮の手に取りすがり、二人の間に割って

入って、もの凄鬼のように宮に縋りつき事なきを得る。

我身姫の女房の中務の君は、何やら御帳の背後で騒々しい風の音がするが、狸寝をして事を避けて居た所、三位中将と女三宮の出会いが次のように行われる。

F 渡殿さまに出でたまひぬるにやと思ふを、またいとけ近くいみじき御けはひを、いかなればと、心得ねど、ただいと空知らずをすばかりと、引きかづきたり。宮は、浅ましかりつるを逃れぬと、うれしう思しわななきつるかひなういみじきに、ましていかなる御心惑ひかはあらん、またも帰りおはせぬを、御心しらひにやとつらう思せど、なかなか今は、ありしばかりの物なさけなく、よろづを聞き入れたまふまじき御身ならぬにや、人にだに知らせず、をこづりやりてんとぞ、思し構ふる。長き夜なれど、暗部の山のかひなさは、ありしよりけに心のみ惑ひて、聞えやりたまはず、むせ返りたまふまぎれに。

線の部分が密通の成功を示す文章である。

冒頭の「渡殿さまに出でたまひぬるにや」は、Dの「我身姫・二宮は」渡殿さまにたどり出づなり」ではなく、Cの「我身姫が二宮に」やがて引かれ出でにけり」を指すと見る。この二宮・我身姫の出で行った「渡殿さま」を、侍従の局と想定すると都合が良いのだが、果して女房の局に、二宮が我身姫をつれて入って来るだろうか。従って、二宮が我身姫を口説く戸口の間とも言うべき空間が不可欠なのである。その

後、この二人はDの「渡殿さまにたどり出づなり」の行動に出る。Fの場面は明らかに女三宮の部屋である。著述が逆になるが、Fの場面からまず記す。「中務の君は」で始まるこの文章は、途中、次のような文章が入る。「宮は、浅ましかりつるを逃れぬと、うれしう思しわななきつるかひなういみじきに、ましていかなる御心惑ひかはあらん、またも帰りおはせぬを、御心しらひにやとつらう思せど」。つまり女三宮は三位中將を避け得なかつたのである。そして夜が明けるが、どうも女三宮の居る部屋と侍従の居る部屋とは隣接しているらしい。次のような文章がある。

大將もいみじうつましければ、やをらすべり出でて聞きたまふに、侍従すかしやりつなりと心得たまひて、よろづも思ひ分かれざりし、かしこうもをこづり出でつるかなと、うれしう聞きたまふ。

三位中將も二宮の事がひどく気になって、女三宮の部屋をこっそりと抜け出して聞き耳をお立てになると、侍従が二宮を言いくるめてお帰したのだという事がおわかりになった。その際の「やをらすべり出でて」とほどの程度の距離なのだろうか。三位中將と女三宮の居る母屋と侍従の局（或は我身姫の部屋）との関係が不明なのである。又、二宮が女三宮の部屋に入って来る所を、Cの部分では三位中將は見えており、それを「奥の方を、いとやをら開くなり。さればよ、わずらはしと思すに、男のいみじうなよびたるぞ、入る来る」とある。

そのあと男と女は「まろび落ちてひこじろふ」、つまり男と女は一緒にもつれ合つて、床の上でひっぱりっこをしていると記されている。一方、侍従が見ている世界もこれと似ている。「男のいみじう忍び来るを」「ひこじろひ落ちて」、この二つの言葉は同じ情景を別人が見て記しているようにも見えるが、この後の記述が違っている。前者Cは、「まろび落ちてひこじろふ」の後、「宮の御ふすまをとらへたまへりけるを、やがて引かれ出でにけり」と、部屋を出してしまうのに反し、後者Eは、「ひこじろひ落ちて、いと強うとらへたまへるに、とかく引き動かすけはひ、さすがにいとるきを、我が御方に聞きなして、いとめづらかなれば、ふと寄り来ぬ。ありし宮なりけりと思うに」とある。「我が御方に聞きなして」何となく我が女主人の我身姫とわかったので、そして「ありし宮なりけり」いづぞやの二宮だと気付くという経過を辿る。これはCの場合は、明らかに女三宮の部屋での出来事であったのだから、そこから戸口の間で、二宮は我身姫を口説き、渡殿を通して、もつれ合つたまふこの小部屋（多分侍従の局）迄来たとしか考えられない。そう云えば、「やをらすべり出でて」も、同室を単に東西に分けた程の近距離とは考えられないのである。従つて今井氏注釈第二冊P214注(20)の「前記の二宮の行動を再度、侍従の目を通して描く」という解には賛意を表しかねるのである。そう解釈すると、どうも一部屋での事で視点が二人（侍従と三位中將）である

ように思えてしまうからなのである。

この「一八波のゆくえ」の段は、私は時間経過を追って比較的正確に書かれていると思われるが、表現稚拙の為にそれがわかりづらいだけだと考えている。二宮と三位中将の描写も対になっており、二宮は如何にも口説き続ける惨めな男に、そして三位中将は、恋の勝者として「夜深き暁起きを」内裏へと帰って行く。闇の部分の終末である。

三位中将の凱歌に反し、Eの部分は、二宮は侍従に遮られ、浮舟・匂宮・乳母の場のような憂き目を見る。

いみじき男と聞ゆれど、女のせちにとらへたらんには、いかが引き放ちたまはん。ありし尼上よりけにいみじき慣さを思せど、中にまろび寄りて、すべていみじき鬼のやうにまつはれきこゆれば、せんかたなくて、いと様よくぞ、こちらの月ごろ思ひ乱れつる心のうちを、聞え尽したまふ。

立派な殿方でも、女が必死になってつかまえたなら、どうして引き放す事が出来よう。侍従は二人の間にこらげるように割って入り、まるでもの凄い鬼のように縋り付いたので、仕方なく宮は品よく、さんざんに思い悩んだ心のたけを長々と懨えられる。尼上の件といふ二宮の人柄の造形にこの件は有効に作用している。二宮と三位中将はこのように対照的に画かれるのであるが、作者は情念と暗との関係をよく承知して書いて居るのである。寝具や動物的動作が明かるい中で記されたら何ともグロテスクである。そしてこの二組の男女の絡みは、

明暗を示し、全くの別室（女三宮の部屋と我身姫の部屋近くの小部屋）で行われたと考えるのが自然であろう。

三位中将と女三宮の逢瀬で——線の「わななき」とは前引Cの延長文中にあった「わななき給ふ」と同じ状況である。

F(1)の波線部は、関白の北の方となれば、娘のようになゞはねつけるような大人気ない振舞は出来ないし……の意であり、(2)の波線は、今迄よりもいそう心が乱れて、ものもうまく言えず、涙にむせかえっていらっしやるそのどさくさにまぎれて……の意である。

これ等の事総てが闇の中で行われており、その上、二人の女房、我身姫の女房・侍従と中務の君の活躍が目覚しいがこの二人の女房は、それぞれ主人に関して逆の活躍しているのである。侍従は二宮と我身姫の間を避く事に務め、中務の君は、二宮と我身姫との密通に我が身を費し、三位中将と女三宮の間を取り持ちこそしないが、見て見ぬふりをしているのである。Fの文章に「中務の君は……渡殿さまに出でたまひぬるにやと思ふを」とあるように、二宮が我身姫を抱いて出て行かれたと中務の君は思ったが……とあるが、この文章は、Dの「かき抱きて、渡殿さまにたどり出づなり」に照応する。中務の君は二宮と我身姫の取り持ち役であるが、侍従が二人の間を懸命に遮っているのがわかっているのである。それがF冒頭の「中務の君は、我だに知らぬさまにと、空寝しければ」と云う表現になって来る。このように、この部分、

暗闇の中で、場所が何度も移動し、筆はそれを微細に追いかけている。その移動の状態を整理したものが、未だ曾ってないので、引用文につけたアルファベットのまゝそれを示せば次のようになるう。

A 我身姫の部屋（侍従在）、B 中務の君の曹司、C 女三宮の部屋（我身姫・女三宮在、三位中将・一宮闖入）、D 戸口の間（二宮・我身姫）、E 侍従の局・或は我身姫の部屋（侍従在・二宮・我身姫不首尾）、F 女三宮の部屋（中務の君在、三位中将・女三宮逢瀬）。

Eが我身姫の部屋かどうかはわからないが、Fの部分に、「^{女三宮}宮は、浅ましかりつるを逃れぬと、うれしう思しわななきつるかひなういみじきに、ましていかなる御心惑ひかはあるらん。またも帰りおはせぬを、御心しらひにやとつらう思せど」とあるが、この部分は、「我身姫が帰ってこないのを、さては大将と自分との事に気を利かせての事かと、恨めしく思ったが」の意である。従って女三宮の居る部屋である事は確かなのだが、それ以前、女三宮の御帳の後で部屋の様子をうかがっている三位中将の視界に次のような状況が起る。前述Cの部分である。

奥の方を、いとやをら開くなり。さればよ、とわづらはしと思すに、^{二宮}男のいみじうなよびたるぞ入り来る。……えしたたかにも出でぬにや、まろび落ちてひこじろふ。宮の御ふすまをとらへたまへりけるを、やがて引かれ出でにけり。

この「まろび落ちてひこじろふ」、これは我身姫である。

我身姫の部屋と女三宮の部屋は、母屋の東西で、中央をふすま障子で区切ってあったのか、この状況を侍従も見ているともとれる節がある。共に似た言葉が用いられている為である。Cでは「まろび落ちてひこじろふ」「まろび落ちてわななき給ふ」、Eでは「ひこじろ落ちて」である。先に引いたCの文章は、「^{三位中将}大将は……」で始まる文章である。ところがこの一節の後、主語は「侍従は……」に変わり、次のような描写が現われる。Eの部分である。

男のいみじう忍び来るを……夜の裾のさはるを、ひこじろひ落ちて、いと強うとらへたまへるに、とかく引き動かすけはひ、さすがにいとしるきを、我が御方に聞きなして、いとめづらかなれば、ふと寄り来ぬ。ありし宮なりけり……今井氏はこの「男のいみじう」の注に、「前記の二宮の行動を再度、侍従の目を通して描く」とあるのである。夜具をひっぱりっこしている描写が似ているといっても、三位中将と侍従が同じ状況を近い地点で同時に見ていたとはとても考えられない。というのは、この辺の文章の主語がかなりはっきりして居て、まず「大将は、……」の文章に始まり、次いで「宮は、……」の文章となり、次に「侍従は、……」となり、最後に「中務の君は、……」となるのである。「大将は……」に始まる文章は、三位中将が女三宮の御帳の後に身を縮めて機会をうかがっている場面で、「奥の方を、……」の文章はその中のもの

である。「宮は……」の文章は音羽の里での出来事をはじめ恨み言を際限もなく言いつゝ二宮が我身姫を口説く場面である。語っている場は「この戸口」とあるから、戸口そのものではなく、「この」と指定出来るような小さな部屋であったようだ。次いで文章はEの「侍従は、……」に移る。戸口の間侍従が居た気配がないから、戸口の間から、二宮は我身姫を「かき抱きて、渡殿さまにたどり出づなり」とあるように場所を移動したのだが、その先がどうも侍従のいる我身姫の部屋だったらしいのである。侍従は最初は、三位中将が首尾よく女三宮を伴って戻ったと思っただが、男女が夜具を引っぱり合って居る様子が有々と見え、まず我身姫を認定、ついで男の方はいつぞやの二宮だと認めると、恐ろしさが先に立って必死に宮の手に取りすがり二人の間どころがるように割って入る。その冒頭の描写がEであり、「ひこじろひ落ちて、いと強うとらへたまへるに」となるのである。この三つの場面は決して同一ではないと考えられる。即ち、女三宮の部屋の描写の部分にも、戸口の間部分にも侍従は居なかったと考えられ、譬え、夜具の引っぱり合いの描写が似て居ようと、そのような状況が常に二人の間にはあっただけの事で、同一の場面を、三位中将の側からと侍従の側から、記述をずらして描写したものではないと考えられる。そうでないと、あの侍従の激しい行動に出る侍従の部屋の場面と、三位中将の目の前で起きた事件・女三宮の部屋で二宮と我身姫の「ひ

こじろふ」行為に侍従が何ら触れる所がないのが、如何にも不自然に感じられるのである。

この闇の中の、密通の成功と不成功の描写は実に微細を極めており、この作者の興味の有り所と、その才能を知らしむる。この描写で頂点を形造った前篇の物語の最末部は、最後は次のような形で結末をむかえる。

女三宮は、あさましかりし夢の迷ひに、いまさらに御心動き、我が御契りも心憂く思し惑ひし名残、まことに苦しうのみ思さるるを、おとどは、(閑白)いつしかめづらしうれしきに、御心を騒がしたまへど、(女三宮は)心の鬼、うたてのみ思し知らるべし。(三位中将)大將殿の宮も、おなじさまに悩み渡りたまふにつけても、(水尾中宮)皇后宮は、ささま押し消たれざりける人の御宿世を、心やましと思すべし。(我身姫)春宮の御息所も、ささま思しいどみたるやうに聞え出づる御なやみを、(嵯峨帝)内はいとうらやましく思しめしたり。

こゝで水尾中宮対皇后宮の対立に、皇后宮側の勝利が告げられると共に、女三宮・女四宮・我身姫の妊娠が告げられる。女四宮の懐妊はあるのだが、飽く迄三位中将の子であり、その子が入内・立后するとは限らない。それに較べ、我身姫の子は皇室の後継者となり、水尾女院は息子を取られた形であり、又、女三宮の子も何らかの形で皇室に係るであろう。「内はいとうらやましく」とは、未だ嵯峨帝に子がないのであるが、この後、後に女帝となる承香殿女御が、嵯峨女院との間に生

れる事となる。こゝで出生を予言される、後涼殿中宮・藤壺皇后・三条帝は、後篇の主人公であるが、この後、十七年の記事空白の間に後の女帝・承香殿女御と、宮の中将の妹・麗景殿女御が生れ、三条帝は、この四人の妃と多様な人間関係を形造る事となるが、それは院になってからの事である。この四人との愛憎のリアリズムは、簡潔に瀬戸内寂聴氏が要約しているが、麗景殿女御にだけは触れていないので、それは別稿でその性格に関係する記事を索いて置いた。確かに他の三人の妃よりも活躍の度の薄い人物であるが、この物語の主題の一つは、この三条院とその四人の妃をめぐる愛憎のリアリズムにあり、瀬戸内氏の文章はその要をよくつかんでいる。今一つの主題・性は、そうした人間関係を越えて、人間を滅すもの、人間を支配するものと認識されており、性が、人格を上まわるもの・滅すものとしての傾向は一品宮と悲恋帝の恋が、性を決して称賛すべき形で扱ってはいないのだが人間性を形成するものとしては巻六の前の齋宮の世界が造形されているのである。

注

- 1 「我身にたどる姫君」(今井源衛・春秋会) 一九八三年。
- 2 同書② P213 語釈(13)
- 3 同頁語釈(23)も同様な見解と解される。
- 4 同書⑦ 「性愛と女の個性を描いて魅力的」